目録体系についての私見

木 村 蔵 六*

極めて素朴な疑問であるが、目録とはどういうものを指すのか、図書館では何故目録と称するものがこうも多く作られるのか、誰がいつどのように利用するものか知れたものでない。この目録のために多くの労力が払われているのを見るにつけ、人生の途中から図書館に身を投じた私にとって、先ず明らかにされなければならない重要な問題であった。

「言林」と平凡社の「世界大百科事典」によると、目録とは「内容を書き並べて分りやすくしたもの」「実物の代りになるもので、紙に書いたもの」ということになるらしい。これからすると、分類・書名・著者名・件名・辞書体・書架等目録といわれるものはもとより、図書原簿も教室別備付け図書簿も定期的刊行物受付簿も目録であろう。一冊の本の目次は一番目の意味の目録であり、私達の図書館で近く作られる筈の国立移管のための図書目録は、二番目の意味の目録である。

以上の通り図書館で作られる目録は種々あるが、これを和洋に分け、更に形の上から、内容から分けると益々複雑になる。

職員数7人、年間平均蔵書増加4000冊のいわば小医学図書館である私達の図書館ですら事務用として、一冊一件の分類目録・閲覧者用として分類・著者・書名・定刊の諸目録、管理用として、図書台帳・教室別備付け図書簿、雑誌受付カード、更には図書の配架を案内する書架目録、これに臨時に作られる製本伝票、注文伝票、この他冊子目録として定刊所蔵目録等々まことに隙限がない。

このように沢山の目録が作られるが、それらには必要があるからこそ作られるのではあろう。だが必要だからといって無方針に記録、目録類をふやしていたのでは、肝心の図書館サービスはどうなるのであろう。目録を作ることがサービスであると考えたものにとっては、それも満足であろうが、そしてそれはサービスの第一歩であることには間違いないものの、近代図書館のサービスはそれだけでよいといい得るのだろうか。

これは余談であるが、この度私達の大学の国立移管が内定し、国立大学のやり方を覗く機会が多くなったが、大学図書館経営の中で物品管理的な仕事の比重が、公立大学図書館である私達の図書館に比し重いのではないかと感じさせられる事例を種々経験した。この事の比重が重くなると、これと目録体系との関係につき今一度検討し直さなければ、人員の点から図書館サービスの低下が余儀なくされるのではないかを恐れている。といっても大学図書館経営の中で物品管理的な仕事を軽視してよいといっているのでも、目録作業は冗漫であるといっているのでもない。乏しい財政の中から購入された書籍が管理の不十分な為に、私物化され、行方不明になるなんてことはまことに堪え難いことであるし、目録がない為に折角購入された本、折角寄贈された本が無秩序に配列されて、捜し出すのに一苦労をし、然もどんな本が所蔵されているかも一々の現物に当らなければ書名すら判明しないといって、学生、研究者を歎かせるなんてことも私達図書館人としては、まことに恥

* Zoroku KIMURA, 山口大学医学部図書館

しいことである。だからこそ、その図書館の目的と、人とお金の現状の分析の上に立って、より経済的な図書館経営はどうしたらよいか、このためには目録体系はどうあるべきかを検討しなければならないといっているのである。

重ねていうと、平均蔵書増加はいくらであるか、図書館を利用する対象は誰か、利用状況はどうか、資料の有効寿命は如何程か、図書館建物特に事務室・閲覧室・書庫・目録室のそれぞれの広さと関係はどうか、職員の能

力と数は、そしてこれらの将来の発展の見通し等、夫々の分析の上に立って、図書館利用のために費される準備的な仕事は管理面を含めて、どの程度が適当であるかを個々の図書館が真剣に検討しなければ私達の仕事場である大学図書館の発展はあり得ないといっているのである。

第 34 次日本医学図書館統計(1963)によると加盟館の目録備付け状況は次の通りであってこれを頭に入れつつ以下若干私見を述べることにする。

	大学数	図書館 職員総 数	分類目 録備付 館	著者目 録備付 館	書名目 録備付 館	件名目 録備付 館	教室別 目録備 付館	登録番 号順目 録備付 館	その他
国 立	21	205	20	21	16	—	8	6	—
公 立	12	74	12	11	9	1	3	2	1
私 立	15	123	13	15	11	1	—	—	—
計	48	407	45	47	36	2	11	8	1

1) 図書館が持っている目録は用途別に大雑把に分けて、図書利用の為の目録、図書管理用の目録、及びこの両方に利用する目録とすることが出来る。又利用対象別に見て閲覧者用、事務室用及びこの双方に通ずるものとする事も出来よう、分類・著者・書名・件名等目録は図書利用のための代表的なものであり、台帳、教室別備付け目録は管理用の代表的なものである。どんな目録が備えられようが、図書は読まれるためにあるので、それはより多くの人に手間暇をかけないで利用出来るよう仕組み準備されていなければなら

ない。従って人員の制約の強い図書館は尚更、そうでない図書館にあっても出来るだけ管理のためのものは、利用のためのもので代用し兼用する工夫が大切であろう。いつどのよう利用されるかわからず、しかも極めて非能率的な帳簿式図書台帳のためにわざわざ多くの労力をかけることは、たとえ事務局会計課で作られているとしても、経営学的にみて不経済である。台帳のために予定された人員は是非サービス向上のために振り向けたいものである。

帳簿式よりカード式が能率的であることは万人の認める常識であり、そしてカード式を

採用するならば一歩進めて、それを図書記号順に並べ現物をもそのカード順に配列することがより機能的であることも万人の認めることだろう。一連番号に郷愁を感じない訳でもないがそれはセンチメンタルというものであろう。不正防止の為に帳簿式台帳がどうしても必要であるというならば、業者の納品書又は請求書に一連番号を付して綴込み台帳とすることも考えられないこともない。だが不正防止のためならば寧ろ件名又は分類目録等利用者の為の目録を完備する等して利用者を管理の面に動員する工夫がより効果的であり、注文、検収、支払等の会計事務を分割分担させることも重要である。

2) 目録の重要性は蔵書数に比例するという考え方がある。予算の潤沢な図書館は利用者が必要とする資料を思いの儘入手し備付けすることも可能であろうが、予算の少ない図書館はそれも出来ないで、紛失、私有化防止と共に、どんな本でもそれが多目的に利用出来るよう工夫されなければならない。目録の重要性は寧ろ予算も蔵書も少ない図書館にこそあるのだというのは言い過ぎであろうか。紛失・私有化の防止は貸出制度と関係があり、一冊の本を多目的に使う為の工夫は目録制度と関係がある。日本においてはたとえ国立大学であっても、財政的に豊かであるといえないので自館で持っているものを有効に利用する心がけだけでなく、相互貸借の御厄介にもならなければならない。国公私立をとわず目録制度の重要な所以であろう。図書資料が発表される量と、その資料に表示されるタイトルの表現の問題もあって、たとえ蔵書を多く持ち得る図書館であっても単なる書架目録だけでは、拡大し増大し細分化する需要を充足することは到底できない。

3) 件名目録がよいか、分類目録がよいかの論は前掲の調査にもかかわらずそれぞれ支持者があって速断し難い。主題が音順に配列

される件名目録と、主題が記号化され記号順に配列される分類目録とでは共に一利一害があって何れをとるかは図書館の自由である。だが何れをとるにせよ一冊につき一枚のカードしか作られないものは大学図書館の目録としては不適格である。日本の所謂分類目録といわれているものは実は分類目録ではなく書架目録であると外国人から批判されているが、殆どどの図書館が分類目録を採用している日本の医学図書館の現状から注目すべき重要な批判であろう。

4) 蔵書が増加するにつれそれを秩序立てて配列しないで置くと、いわばガラクタの堆積となりその中から欲しいものを見付け出すことは到底望めなくなる。従って図書館ではこんなことにならないよう所謂配架の仕事をする訳で、年代順に並べることも、著者順に配列することも、書名順に配列することも出来よう。だが今日の多くの図書館は分類し記号順に並べて居り、定期刊行物については誌名順に配架することもある。何れにせよ配架は目録と密接な関係があるのでたとえ特別にこのための目録を持たないで他の目録で代用している場合でも配架を無視してはならない。

5) 分類の事務手続きはどのように行なわれているか、分類簿を設けている図書館もあるようだが、煩雑でやり切れないのではない。所謂事務用の基本目録を備えてこれを分類簿とし、書架目録と台帳に代るものとしてはどうであろう。

6) 調査によると日本の医学図書館では著者目録を持っているもの 46 館、書名目録を持っているもの 36 を数えるが、著者目録が書名目録に比し重視されていることの証左であろう。中に書名目録を重視していると思われる館があるが、何れか一つを持つとすれば寧ろ著者目録にすべきではないだろうか。

7) 前掲の調査によると帳簿式かカード式

かは不明であるが登記番号順目録を持っている館が私達の館を含めて8館もある。帳簿式登記番号順目録(所謂台帳)については改めて述べないが、カード式登記番号順目録については、そのカードが騰写されたもので大した手間暇がかかったものではないにしても無駄なことには変りはない。私達の図書館では無駄と知りつつ廃止するフンギリをつけないで居る。

8) 毎年多くのカードが組み入れられ、無限に増加してゆく目録をどのように処置したらよいか。膨大なカードの中から一つの資料をみつけ出すことは大海の中から難波した小舟を捜し出すにも似て、スピードの要請せられる今日、何とかならないものか。利用が薄くなった図書のカードは抽出して、代りに一覧性がありスペースをとらない冊子目録を作ることが考えられているが、それも預託図書館制度の実現していない今日やむをえないこととは思ふものの、何か良い考えはないものか。百年に一度利用があるかわからない資料のために場所を提供し、目録を作り替えることの愚は特に版次の古くなったものの利用が急激に低下する医学書の実情から、400 平米の平均書庫面積で 10 万冊を収めるにも足り

ない広さしかない医学図書館の現況と書庫の適正規模の問題との関連を併せ考えるとき、その愚は絶対に避くべきであるといっている過ぎになるであらうか。

9) 医学図書館界にあっては「医学中央雑誌」「Index Medicus」「Excerpta Medica」等文献の索引・抄録誌が多く出されているので、分類又は件名目録を作ることは必要でないように見える。又医学文献の機械検索が既に実用の一步を踏み出していると言われている今日、特に手書の目録の如きは問題視されないように思える。非能率的なことは改めらるべきだし、機械の導入も大に行なわれるべきだとは思うが、だからといって機械検索が日本で直に実用化されるとは思われないし、抄録誌、索引誌といってもすべての文献をカバーしているとは思えない現状から決して分類件名両目録の重要性は薄らぎはしないだろう。以上目録体系につき若干の私見を述べたが利用者の為の目録を充実する為に増員が望めない実情から拡張過ぎる目録体系よりは寧ろ件名又は分類目録を中心とした経済的な目録体系を考えるべきであるとの意見を付け加えて結論とする。